

て、健康な出産を実現させようとする違いがある。

終章「産婆世界解体プロセスにおける出産・自然・癒し」では、全篇の総括と解説がなされている。米国における出産の変化―助産婦から医師へという歴史的变化の基底には、二つのセクタリアン運動にみられる様な異なる自然観、身体観の葛藤が存在したというのが著者の主張である。

ロジャースは「女性とセクタリアン医療」という論文で、一九七〇年代初めから社会学者、歴史学者達の間で、米国の医療の中のセクタリアン医療に関心がもたれる様になったと述べているが、本書もその傾向と無関係ではなからう。一九八二年、本書にも引用されているリーヴィット、ラジェ、またドニソン氏ら海外の六名と、日本から評者ら四名とで行った「産科史」についての谷口財団シンポジウムのがが想起される。これらの女性学者は医師ではなかったが、レイ・ウーマンの助産史観にはフェミニスティックな所があるような印象を受けた。セクタリアンの自然の強調と、最近の自然分娩論とは環境が違い、同一視するのはアナクロニズムである。しかし産科医の間でも、十八世紀オジアンデルの鉗子率四〇%とボエルの自然的助産術、我国の賀川流とその反対者に代表される積極・手術主義と待期・自然主義の二代潮流があり、後まで続いている。なお最近代替医療（オルタナティブ・メデイスン）学会の存在を知ったことを付記しておく。出産を思索させる好著である。

(石原 力)

〔新曜社・〒101-0051東京都千代田区神田神保町二一〇〕電話〇三―三二六四―四九七三、一九九七年十二月、四六判二八四頁、本体三八〇〇円。

杉田暉道著

『やさしい仏教医学 わが国最初のターミナル・ケア学』

五三八年、百濟聖明王からわが国に仏像と仏教の聖典が献ぜられたのが、わが国への仏教伝来の始めとされている。この時以来今日まで、仏教はわが日本民族の政治・思想・社会・経済などのすべての分野で深いかかり合いを持ってきたことは周知の事実である。著者は多くの仏典及び僧侶の著書の中から、医療についての記述を抽出し、兎角難解な仏教用語をやさしく解説しながら、仏教医学への理解を深めようと試みたものである。

本書は仏教医学とは・仏教医学の治療・仏教教団の一日の過ごし方・日本における仏教医学・仏教医学とターミナルケア・仏教医学の復権の六章から成り立っている。

「仏教医学とは」では、冒頭から(一)ブツダの侍医・ギバの脳・痔・腸捻転などの六つの治療法、(二)苦・集・滅・道の四諦の思考方法が医学治療の考え方に類似していること、

(三)インドで仏教教団に入団する場合の健康チェックの方法、(四)仏教医学とアーユルヴェダ(インドの伝統医学)の病因論の比較、(五)金光明最勝王經(三世紀頃成立、日本で奈良時代に広く読経)の中の医療の記述、(六)経典に書かれている

看護、(七)アショカ王(紀元前三世紀)の世界最初の病院の建設について述べている。

「仏教医学の治療」では、伝染病を初めとする内科的・外科的治療法や薬物を経典「十誦律」「摩訶僧祇律」などから抽出、また唐時代インドに留学した中国の僧・義浄(六三五一七一一三)の報告書として著した『南海寄帰内法伝』に記されている自ら体験したインド医学を詳細に紹介している。

「仏教教団の一日の過ごし方」では、古代インド仏教教団の僧侶の朝起きてから歯磨き・食事・洗浴から就寝にいたるまでの生活を上述の義浄の著書を参考にして述べられている。

「日本における仏教医学」では、(一)奈良時代の看病僧・玄昉・良弁・道鏡、中国から渡来した鑑真(僧医)、女性救療家の光明皇后・和氣広虫の活動、つづいて鎌倉時代の僧・叡尊と忍性の慈善、救癩、社会活動を詳細に述べている。(二)江戸時代の臨濟宗の中興の祖師・白隠禪師の唱えた内観法による健康法を彼の著書『夜船閑話』を参考にして図解入りで紹介している。これは寝ながらできる仰臥禅(寝禅)で現在禅ブームの影響もあって注目されているという。(三)インド・日本における穢れの思想や不浄観・浄土観と地獄観の歴史的推移を述べ、現代日本の穢れの実態とそれに対する日常の衛生習慣に及んでいる。

「仏教医学とターミナルケア」では、法然と親鸞の「死を待つ自覚」の信仰にふれたのち、わが国最初の看護、特にターミナルケアに関して、鎌倉時代の僧・良忠(一一九八―一二八

七、浄土宗の第三祖)の著『看病用心鈔』を詳細に紹介している。この書は、看病的知識と仏教的素養を有する看病人に対する教科書で、その多くは現代でも通用しうるものであり、傾聴すべきものであると言えよう。ついで、現代のターミナルケア、すなわちガンの告知などの患者や家族へのケア・ケアの教育・ケアと宗教などについて著者は貴重な種々の提言をされている。

最終章「仏教医学に復権に向けて」では、魂を否定し、科学的合理性のみによつて病気を技術的に治療しようとする近代医学の反省を促し、大乘仏教の教えにしたがつて、意識を変革し、精神的な自由、平等、慈悲の心(人を生死転廻の苦しみから救おうとする憐れみの心)をもつて行うことを提唱している。さらに現代の社会奉仕(ボランティア)活動の意義・実践方法、手段について具体例をあげて提言している。

筆者は批評するだけの力量を持ち合わせていないので、各章の項目について簡単に紹介したが、筆者の希望を一つ述べさせていただければ、東大寺を再建した重源が各地に湯屋を建て、救療事業を行ったが、その根本の仏典と考えられる「仏説湯室洗浴衆僧經」について解説していただきたいかったことである。

(中山 沃)

(出帆新社) 〒156-0052 東京都世田谷区経堂 二―二―四、電話〇三―一三四三九―〇七〇五、一九九七年十月、菊判二八三頁、本体二八〇〇円。